

澁川廃寺

現地説明会資料

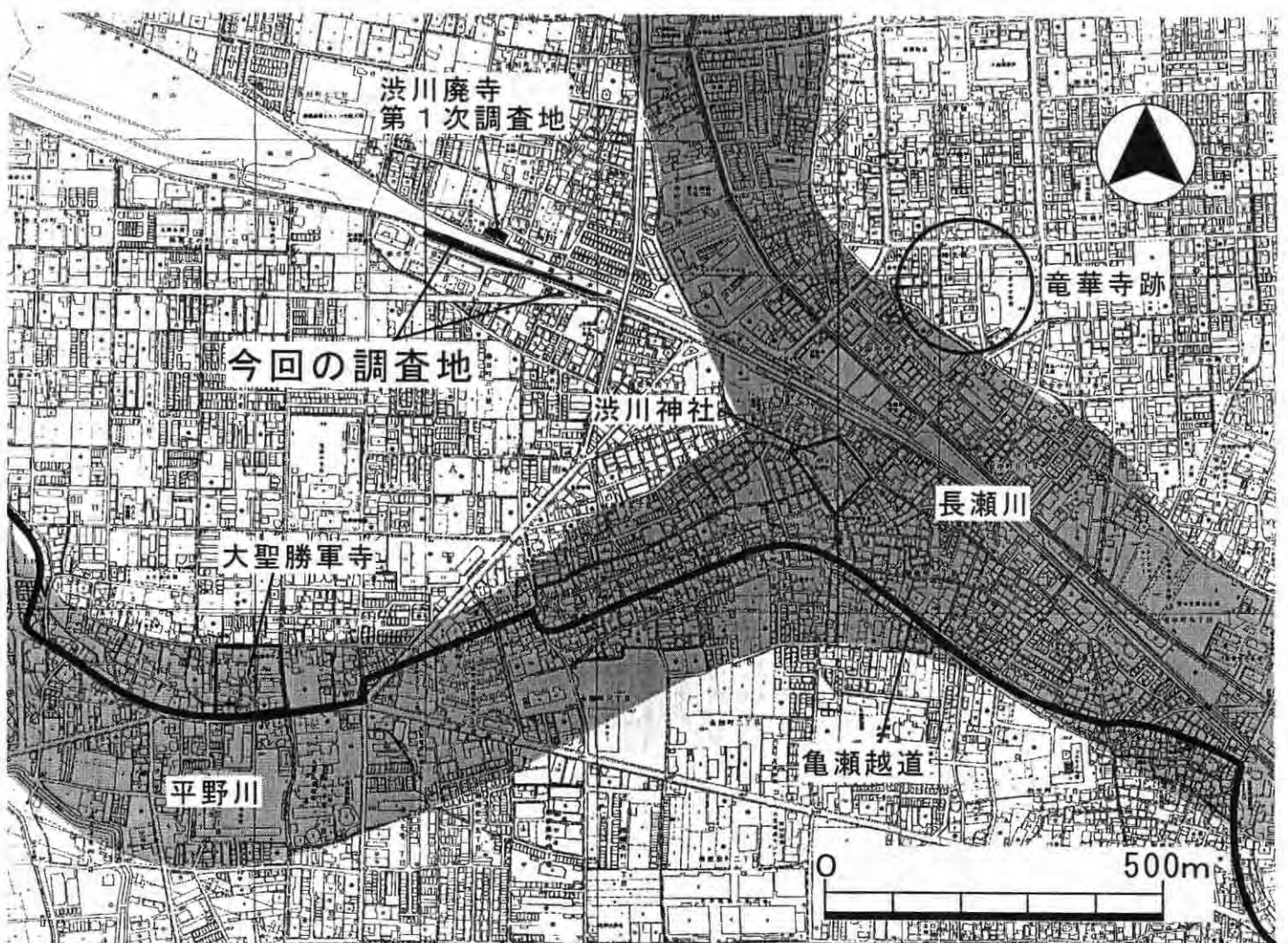
2002年6月22日
財団法人八尾市文化財調査研究会

◎ はじめに ◎

八尾市澁川にある澁川廃寺は、飛鳥時代に創建された中河内最古のお寺と考えられています。大正年間に行われた鉄道工事の際、塔の心礎（しんそ）や飛鳥～奈良時代の瓦が調査地付近で掘り出されて以来、その存在が考えられるようになりました。また、室町時代に書かれた『太子伝玉林抄（たいしでんぎょくりんしょう）』に聖徳太子が建てたお寺として当地付近に「澁河寺」の存在が記されていることから、このお寺が「澁川（河）寺」と考えられるようになりました。

発掘調査では、1990年に行われた第1次調査で、溝の中から大量の瓦に混じって、お寺の主要な建物の屋根に飾られる鴟尾（しび）が見つかっています。

今回の調査は澁川廃寺の第2次調査にあたり、都市計画道路敷設工事に伴うもので東西約280mにわたって実施しました。



◎ お寺はどこに？ ◎

今回の調査では、奈良時代後半（8世紀後半ごろ）の整地層が発見されました。この整地層は飛鳥時代（7世紀前半）の流路が埋まった後におこなわれていて、この中には飛鳥時代～奈良時代後半までの大量の瓦が捨てられていました。また、捨てられた瓦の中からは、八尾市域で最古の軒丸瓦【豊浦寺（とゆらでら）式】が見つかっています。さらに、整地層以外からも大量の瓦が出土していて、その中には法隆寺系軒丸瓦や新しく見つかった軒平瓦が含まれています。

今回は残念ながら、お寺そのものの跡ははっきりとはわかりませんでした。見つかった大量の瓦からも、この地にお寺に関係のある建物があったことは間違いありません。周辺の調査が進むにつれて渋川廃寺の正確な位置が判明する日が近い将来やってくることでしょう。

◎ 渋川廃寺ってどんなお寺？ ◎

渋川廃寺は中河内で最古のお寺といわれています。大正年間まで残っていた塔の心礎や前回の調査で見つかった鴟尾から、整った伽藍（がらん）（建物の配置）を持ったお寺であったことがわかっています。また、軒瓦は奈良県明日香村の豊浦寺と同県斑鳩町の法隆寺の2系統のものがみつかっています。渋川廃寺はこの2つのお寺と何らかの関係があったものと考えられます。これらの瓦や他に見つかった土器から見て、渋川廃寺は飛鳥時代前半に建てられて奈良時代の終わりごろ（8世紀末ごろ）には、なくなってしまったようです。

渋川廃寺に関する研究には、物部守屋（もののべのもりや）の別荘を壊して造ったとする説、もともと物部守屋のお寺があったとする説、そして物部守屋滅亡後に聖徳太子によって建てられたお寺で、称徳（しょうとく）天皇と弓削道鏡（ゆげのどうきょう）が参拝した竜華寺（りゅうげじ）とする説があります。今後の発掘調査で渋川廃寺の本当の姿が明らかになる日が楽しみです。

渋川廃寺関連年表

年号	おもな出来事	備考
538年（欽明7年）説 552年（欽明13年）説	仏教が伝来する。	帝説 紀
587年（用明2年）	物部守屋が聖徳太子・蘇我馬子等の連合軍と渋河の家で戦い戦死する。（物部本宗家滅亡）	紀
588年（崇峻元年）	飛鳥寺建立。（日本初の本格的寺院）	紀
7世紀初頭	豊浦寺建立。（蘇我本宗家の尼寺）	
645年（大化元年）	大化の改新。	紀
7世紀後半	法隆寺西院伽藍建立。	
710年（和銅3年）	平城京遷都。	続紀
765年（天平神護元年）	称徳天皇が弓削行宮・弓削寺に行幸する。	続紀
769年（神護景雲3年）	称徳天皇が由義宮（ゆげのみや）に行幸し、竜華寺の西の川上に市を設けて遊覧する。由義宮を西の京とし河内国を河内職とする。	続紀

帝説：上宮聖徳法王帝説 紀：日本書紀 続紀：続日本紀

豊浦寺式軒丸瓦—7世紀前半

奈良県明日香村の豊浦寺で使われていた単弁八弁の高句麗系のもと同系統の軒丸瓦。この軒丸瓦には、セットとなる軒平瓦はないと考えられています。

渋川廃寺では、創建期に使用されていたようです。

法隆寺系軒丸瓦—8世紀前半

7世紀後半に成立した法隆寺式軒瓦の系統を引くものと考えられます。軒丸瓦の文様は複弁八弁ですが、周縁にある珠文（しゅもん）、子葉の凹線、そして中央の文様は珍しく法隆寺系の中でも初めて見つかったものです。下記の軒平瓦とセットになると考えられます。

法隆寺式軒平瓦—8世紀前半

文様は忍冬唐草文（にんどうからくさもん）ですが、少し丁寧さがなくなっているようです。

註：この軒平瓦は昭和11年に付近で表採されたものです。

〈単弁六弁〉軒丸瓦—8世紀後半

周縁にある珠文（しゅもん）や子葉の凹線は、上記の法隆寺系軒丸瓦の影響を受けていると考えられます。また、渋川廃寺以外では、見つかりません。

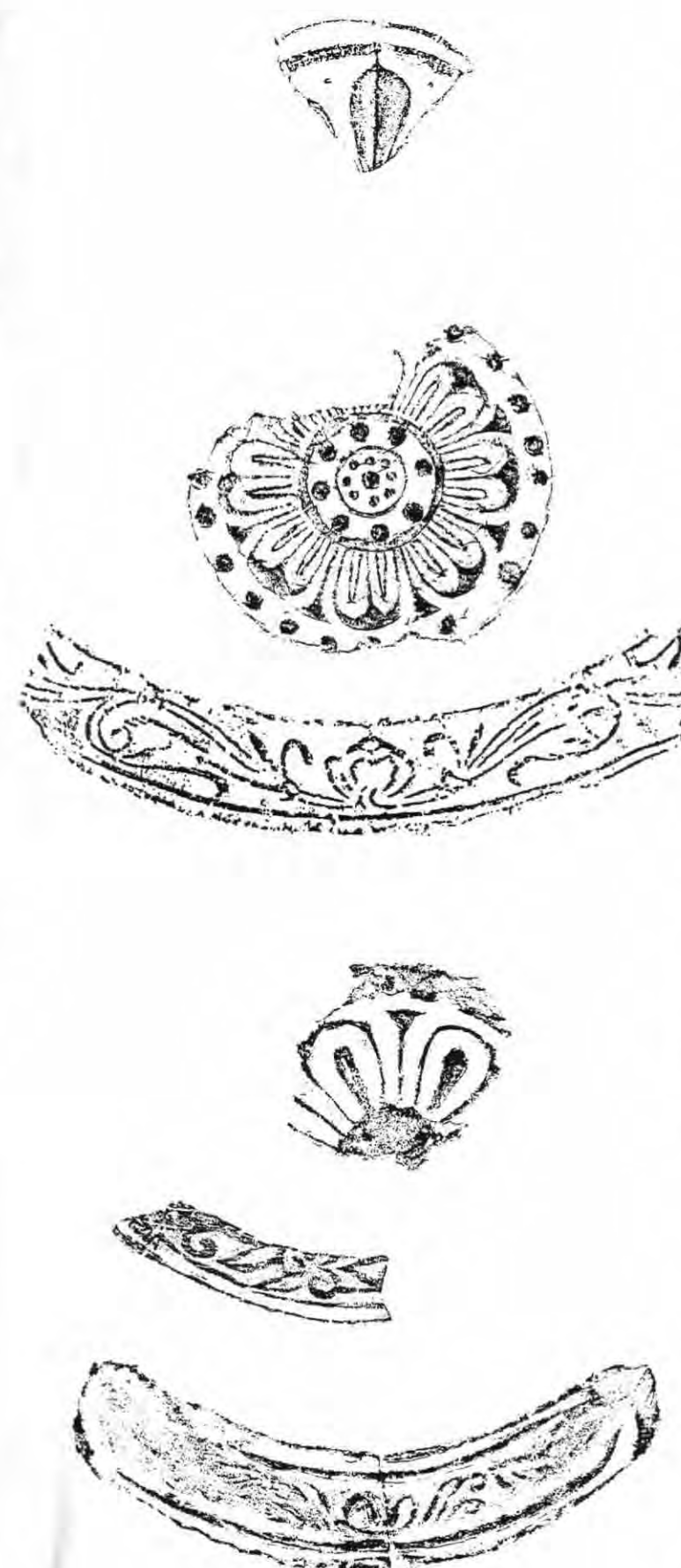
下記の軒平瓦のどちらかとセットになると考えられます。

〈忍冬唐草文〉軒平瓦—8世紀後半

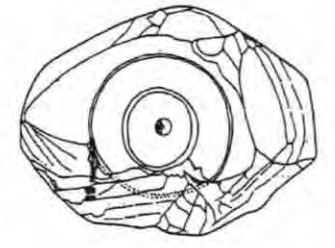
法隆寺式軒平瓦の文様が退化したものと考えられます。

〈均正唐草文〉軒平瓦—8世紀後半

平城宮式軒平瓦によく似ていますが、文様はかなり退化しています。

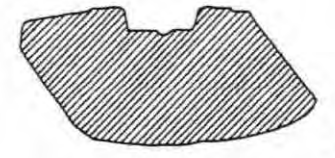


塔心礎



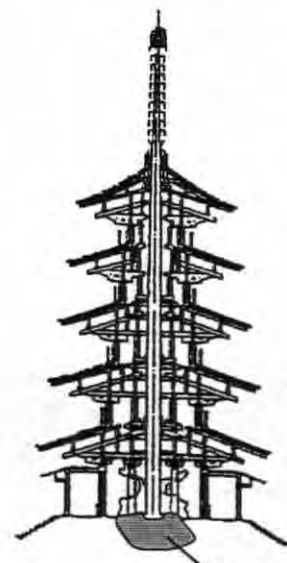
大正年間の線路工事の時に取り出されるまで、田んぼの中に顔をのぞかしていたそうです。この心礎のあった場所は、残念ながら正確にはわかりません。

約1.5×1.95mの楕円形で高さは約90cmの大きさです。そのほぼ中央に塔の心柱を据えるための直径約50cm、深さ15cmの孔が掘られています。



(S = 1/50)

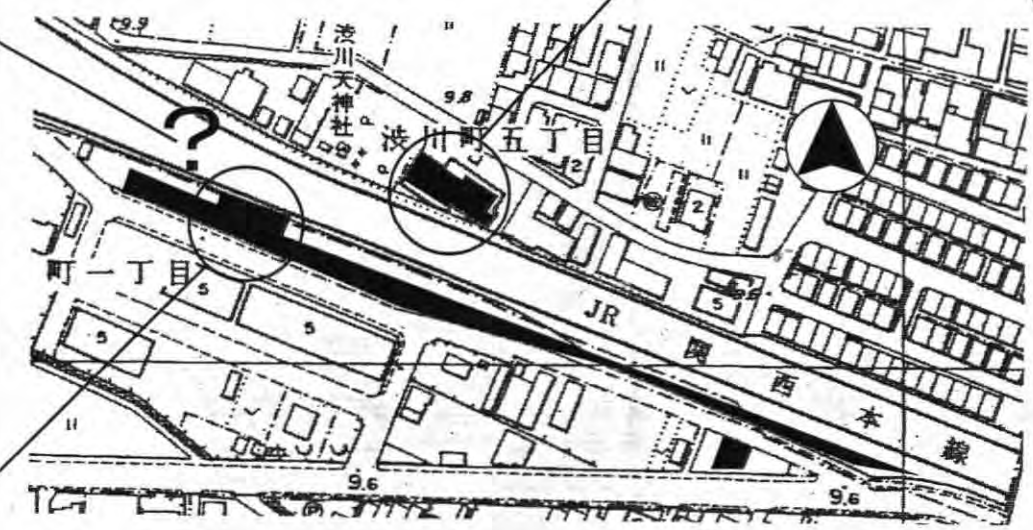
塔と心礎



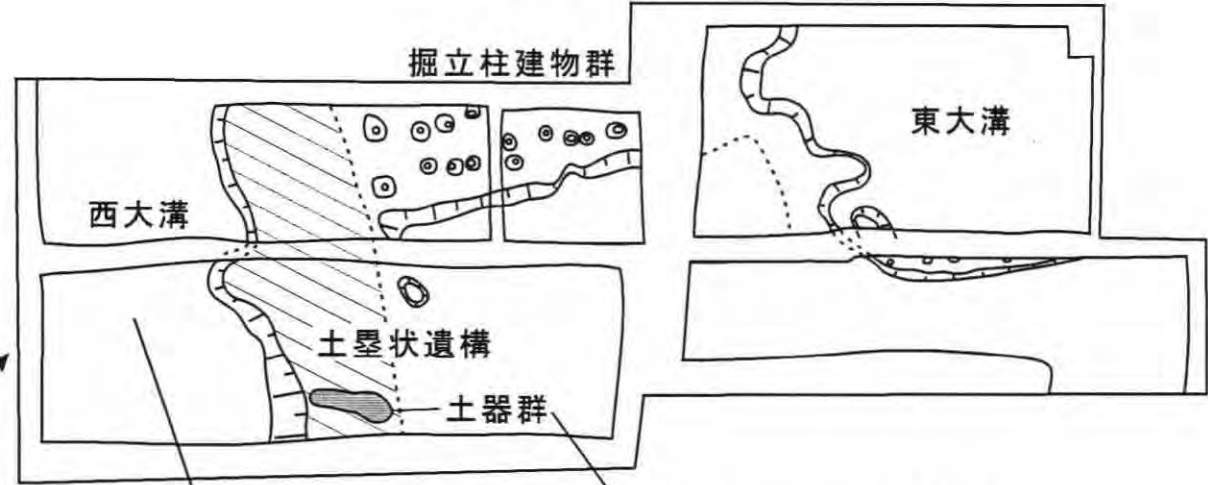
法隆寺の五重の塔をもとに心礎を置いてみました。淡川廃寺では、どのような塔が建っていたのでしょうか？

五重の塔の図面は
岡田英男1995『法隆寺と薬師寺』
『古代寺院の移建と再建を考える』
より転載しました。

心礎



調査位置図 (S = 1/2500)

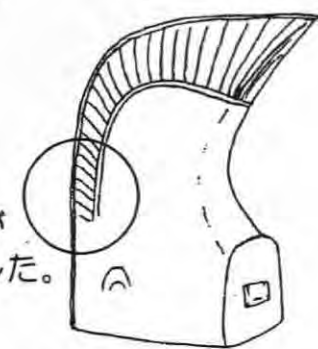


1990年の調査地 (S = 1/200)



土器群

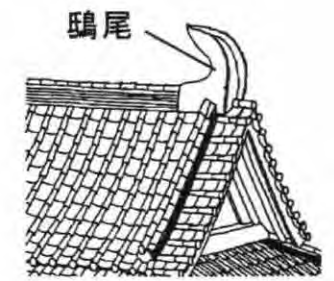
第1次調査の時、土壘状遺構の中から須恵器の壺など6点が、真っ直ぐに並んだ状態で見つかっています。飛鳥時代のもので、地鎮のために意識的に埋められたものと考えられます。



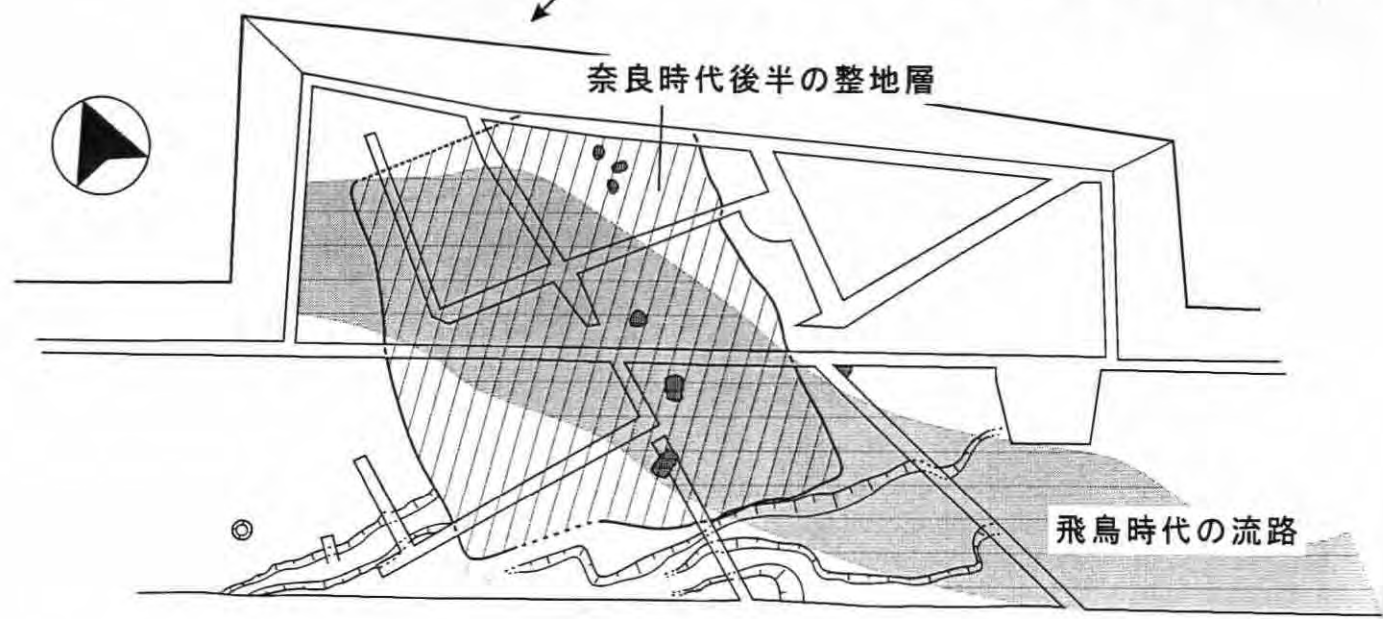
この部分が出土しました。

鴟尾(しび)

第1次調査の時、西大溝から、大量の瓦と一緒に見つかりました。表面に線で刻まれた装飾が見られるものがあり、鱗(ひれ)の部分表現をしています。また、大阪市の四天王寺で出土しているものと文様表現がよく似ていることも特徴です。



鴟尾は屋根の上に飾られます。



今回の調査地 (S = 1/200)

至文堂発行 大脇潔著『日本の美術 392 鴟尾』より転載しました。